

慶応期中央政局における薩摩藩の動向―王政復古を中心として

町田 明広

慶応期（一八六五―六八）における政治過程を、最も重要でありながら十分な研究レベルにない薩摩藩、特にこれまで西郷隆盛・大久保利通を中心とする歴史観によって等閑視された最高権力者・島津久光と、その側近で現場での政局運営の総指揮官・小松帯刀を基軸として、王政復古を中心とする幕末維新政治史の再構築を試みることを目的とする。

具体的な研究概要としては、第二次長州征伐から王政復古クーデターに至る事象を、久光・帯刀の視角から分析した政治過程の解明に加え、①久光・帯刀の対幕府政策や新国家論の変遷の分析、②久光を頂点とする薩摩藩内における意思決定・指示命令系統の仕組み

みと帯刀以下藩士の役割分担の検証、③久光・帯刀に対抗する藩内勢力の実態の考察、④この間の国事周旋を可能とした薩摩藩の財政的基盤の究明、の四項目である。これらを踏まえ、薩摩藩にとって「王政復古」とは何かを検証したい。

具体的には、刊本史料・文献の一部収集と徹底的な読み込みを行い、かつ都内（憲政資料室・東大史料編纂所等）および鹿児島県や山口市での未公開史料の調査・収集を積極的に実行し、それらの整理・翻刻を行う。また、二〇一八年は明治維新一五〇年にあたるため、各地で企画展等が開催されており、可能な限り足を運んで調査を心掛け、これらの成果を統合して、

幕末維新政治史の解明を企図したい。

なお、主たる調査対象としては、鹿児島県黎明館の寄託史料「桂家文書」、山口県文書館「年度別書簡集」「木戸家蔵書牘写」、東大史料編纂所「薩摩史料稿本」「旧邦秘録」、憲政資料室「石室秘稿」とする。これらの史料は、未翻刻のものがほとんどであるため、その翻刻にも注力しながら、これらの分析を通じて研究を深化させたい薩摩藩内における意思決定・指示命令系統の仕組みに迫りたい。

その他、鹿児島県歴史資料センター黎明館の内倉昭文学芸課長、市村哲二・町田剛士の両学芸専門員、鹿児島県図書館の原口泉館長、尚古集成館の松尾千歳館長、岩川拓夫学芸員、西郷南洲顕彰館の徳永和喜館長等との意見交換を積極的に行い、調査結果の補完を行いたい。